芦屋市立精道幼稚園の誕生から昭和 36 年までの歩み

－ 一人一人を育てる保育研究の在り方からの一考察 －

History of Ashiya City Seido Kindergarten since 1961 :

－Study of Individual Childcare Values.－

久米 裕紀子

KUME, Yukiko

武庫川女子大学　学校教育センター紀要

第 6 号　2021 年

【研究報告】

芦屋市立精道幼稚園の誕生から昭和 36 年までの歩み
－　一人一人を育てる保育研究の在り方からの一考察　－

History of Ashiya City Seido Kindergarten since 1961：
－ Study of Individual Childcare Values. －

久米　裕紀子*

KUME, Yukiko*

要旨

本研究は，芦屋市立精道幼稚園の「保育研究」についての取り組みを，沿革誌や研究紀要等からその変遷を辿り，当時の幼児教育の実態や幼稚園教育の目指した保育を明らかにすることを目的とする。一人一人を育てる保育について考察してくことを目的とする。幼稚園の設立された 1911（明治 44）年から 1961（昭和 36）年までの 50 年間を振り返った結果，教師たちが子ども中心の，一人一人を育てる保育を目指しており，そのために教師の力量向上や保育の質の向上のために自己研鑽していることが明らかになった。

１．はじめに

2018（平成 30）年 3 月 31 日，芦屋市立精道幼稚園は 107 年の歩みに幕を下ろした。翌日の 4 月 1 日より芦屋市立精道こども園として，芦屋市立初の認定子ども園が誕生した。現在，待機児童，保育所不足，少子化等の社会の現状に伴い，公立幼稚園の危機とも呼ばれる時代が到来している。公立幼稚園が目指してきたもの，これからも守っていかなければならないもの，保育における様々な課題を明らかにする必要があろう。

そこで，本研究では芦屋市立幼稚園の「保育研究」についての取り組みを，沿革史や研究紀要等からその変遷を辿り，当時の幼児教育の実態や幼稚園教育のめざした保育を明らかにすることを目的とする。特に，本稿では，幼稚園の創立された 1911（明治 44）年から 1961（昭和 36）年までの 50 年間に焦点をあてる。芦屋市を選択したのは，阪神間で最初に 2 年保育を始めた自治体で，幼児教育に力を入れてきた経緯があるためである。そのような芦屋市の歴史を辿ることで，幼児教育に求められたこと，受け継がれているもの等が明らかになるだろう。

２．創立当時（大正時代）

精道村に村立精道幼稚園が創立されたのは 1911（明治 44）年である。精道村の有志の家庭が，我が子に幼児教育を受けさせたいと強く願い，小学校内に幼稚園が開設された。当時の様子は，1934（昭和 9）年起の沿革誌に 1951（昭和 26）年の調査によると記され，1911（明治 44）年から遡って記されている。

（1）創立当時の様子

精道村立精道幼稚園「證書臺帳」に，1911（明治 44）年卒園児として 6 名の氏名が記されていることから，創立時の園児数は 6 名，小学校内に開園されたことが分かっている。

当時の思い出を創立 60 年記念誌に寄せられたメッセージより

“着物姿の先生とよく松林の家へ行きました”

＊ 教育学科講師

“松露を拾ったり，かくれんぼをしたりして，先生と一緒に遊んだ”
“あしや中がわたしらの遊び場でした”
と記されており，写真１は，小学校校庭で着物を着て遊ぶ園児の様子が映っている。

写真１　創立当時の幼稚園

開　　園	明治44年10月1日
場　　所	武庫郡精道村宇樋口 新田1915番
園 児 数	6名
保育施設	保育室(1)
園　　長	精道尋常高等小学校長 橋本三之助氏　兼任
職　　員	保姆　1名

図１　創立当時の概要

表１　精道村立精道幼稚園のあゆみ（明治～大正時代）

年　次	西暦	歴代園長	園児数	クラス数	あ　ゆ　み	園者の遷移	当　時　の　出　来　事
明治44年	1911	橋本三之助	6	1	・公立幼稚園の許可を得て、精道村立精道幼稚園と称し、精道小学校内に併設として開園する（併設小学校内）	精道小学校内併設	・東海道線。神戸ー新橋開通(29年) ・阪神電車開通(38年) ・ブラジル移民第1船神戸出湊(783
45	1912		7				
大正 2年	1913	吉積龍太郎	14				
3	1914		9			南松林魚岩	・宝塚少女歌劇団公演始まる
4	1915		19			村役場会議室	・第一回全国中学校野球大会始まる
5	1916		10				
6	1917		24				
7	1918	岸本　勝蔵	14				
8	1919		24				
9	1920		36				・神戸海洋気象台完工 ・時の記念日制定
10	1921		22				
11	1922		44	2			・「コドモノクニ」絵本創刊
12	1923		41	2			・関東大震災
13	1924		40	2			・甲子園球場竣工
14	1925		51	2			
15	1926	小林まさえ	51	2	・幼稚園令改正と同時に独立園となる		

創立時の園児６名は，精道村の有志の家庭が，我が子に幼児教育を受けさせたいと強く願い，小学校内に幼稚園を開園された。当時は保育者（保姆）１名である。着物を着て登園していた。「精道村（芦屋）は，海と山，川など自然に恵まれ，教育には大変熱心で豊かな家庭の方が住んでいたこともあり，幼児期からの教育に関しても積極的だった」と，第 12 代園長の久野富美子氏（2018（平成 30）年没 107 歳）から 2011（平成 23）年に開催した創立 100 周年お祝いの会にて話を聞くことができた。

（２）幼稚園令

1925（大正 14）年に全国の幼稚園に関する調査が行われた。翌 1926（大正 15）年幼稚園単独の「幼稚園令和」が勅令で定められ，また「幼稚園令施行規則」が省令で定められるようになった。大正時代の初めには幼稚園の数は 500 余り，園児数は 45,000 人に過ぎなかった。米騒動のあった 1918（大正 7）年を除き，徐々に増え続け，大正末には幼稚園の数は 10,000 を超え幼児数は 94,000 人に達した。この制度により日本の幼稚園の仕組みが確立された。

（3）大正時代の様子

明治から大正に移り，幼稚園令により，園児数の増加がうかがえる。芦屋という地域がらもあり，幼稚園教育を受けさせたいと願う家庭が芦屋に住まいを構え，神戸や近隣の市からも通園していたことが，證書臺帳（写真6）に記されている園児の住所から分かる。

当時の様子について，「創立60年を迎えて」の記念冊子に，卒園児が思い出を寄せている。

① 通園の様子などについて

・ほとんどの方が女中さんか乳母さんが附添って，フリルやギャザーの付いた白いエプロンをつけて，かわいい姿でした。

・後に妹や弟もお世話になるからといって100円寄付金を納めました。

・父が商用でヨーロッパに行った際，スイスのジュネーブの幼稚園を参観し，帰国後に先生に話をいたしました。1924（大正13）年

教育熱心な限られた家庭の子どもたちが幼稚園に通っていたことが分かる。

② 幼稚園の環境や自然の遊びについて

・松林をそのまま校庭にしたようなもので，塀があるわけでもなく，細い溝が道路との境で，周り一面田んぼや小川というのどかでした,。

・校庭の大きな木の太い幹の周りを柵で囲って鶏を飼っていました。

・大きなゴムの木が印象に残っています。

・ユーカリの実を拾って，ひごでつなぎ細工遊びをよくしました。

・太い，松の幹にすっぽり身を隠してかくれんぼをよくしました。

・野球が流行ってきて，松の木が邪魔になってきたのを覚えています。

・一面の田んぼや，畑，その間を縫うように小川が流れ，松林が遠く宮川，西宮あたりまで続き，北は芦屋天神まで１本の草むら道を通って行き，東は西宮の戎さんまで足を伸ばして遊びました。

・白浜が広がり，時折，漁師のいわし網を手伝ったりしました。

豊かな自然環境やのどかな遊びの思い出が綴られている。

1913（大正2）年には，精道小学校に児童の増加に伴い，松浜のテニスコート付近にあった料亭魚岩の日本家屋に移転した。当時の芦屋は急激な開発ブームで，唯一の交通機関にある阪神電車を中心に一面の田んぼが道になり，家屋になって，人口も増え，村が変貌していき，小学校校舎の一部を借りていた幼稚園は止むなく，精道村松浜にあった大阪船場の料亭魚岩(休業)の日本家屋に引っ越し，便所，手洗い場を改造して保育を行った。小学校の生徒の人数の増加は，幼稚園の園児の増加でもあり，沿革史（表1）からも園児数の増加状況が分かる。

③ 保育について

・「むすんでひらいて」「金太郎」「汽車が通る」，からすがカアカア鳴いている…など，畑の一本道をよく大声で歌って歩いたものです。

・絵を描く時は，6本入りとか12本入りの鉛筆を使いました。クレヨンは少し後でできました。

・着物姿の姿の教師がお遊戯をよく教えてくださいました。（写真２）

・折り紙遊びで思い出すのは，折り紙が和紙で大変残っています。

写真２　紋付袴　被布姿の子どもたち

・麻疹の時だけ休んだように覚えています。

・弁当を持って通園するのが何よりの楽しみでした。丸いアルミの弁当箱を毛糸で結んだ袋に包んで通ったものです。

３．戦前・戦中時代（昭和のはじめ）

昭和に入ると，満州事変，日中戦争，太平洋戦争と日本は戦争がはじまった。その中での幼稚園の保育はどのように行われていたのか，1927（昭和 2）年から 1945（昭和 20）年まで幼稚園のあゆみから辿る。

表２　精道村立精道幼稚園のあゆみ（昭和：戦前・戦中時代）

年　次	西暦	歴代園長	園児数	クラス数	あ　ゆ　み	園者の遷移	当　時　の　出　来　事
昭和2年	1927		51				・「キンダーブック」創刊
3	1928		50				
4	1929		59				・神戸市諏訪山に動物園開園
5	1930		61				
6	1931		72				・満州事変起こる
7	1932		49				・六甲山ケーブル営業運転開始
8	1933		81				
9	1934	仲本　三二	61		・廃園となり改めて、精道小学校附設幼稚園となる	現消防署付近にあった校舎内	
10	1935		100				
11	1936		120	3			
12	1937	賀集　富治	98	3			・日中戦争勃発
13	1938		92	3			
14	1939		87	3			
15	1940		104	3	・精道村に芦屋市制が布かれ、芦屋市立精道幼稚園と改称され、小学校内に移る(11月10日)		
16	1941	岩谷　省三	100	3			
17	1942		95	3	・幼稚園講演会の名称を保護者会と改める		
18	1943	岸野市五郎	152	3			
19	1944		134	3			
20	1945		35	3	・戦局苛烈となり入園式のみ行い休園する		・阪神大空襲 ・太平洋戦争終結

1935（昭和 10）年には園児数は 120 名となっている。戦争がはじまっても，園児数は直ぐに減少することはなかった。その理由として，芦屋という地域が大阪や神戸に挟まれてはいるが，戦争中も比較的戦火から外れていたからではないかと考える。

当時の保育について，その時に教師をされていた芳村貞子氏（1934（昭和 9）年 2 月～18 年 3 月まで勤務），田村ゆき江氏（1935（昭和 10）年 2 月～21 年 12 月まで勤務）のインタビュー記録が残っている。（下記に記載：抜粋）

（1）　子どもたちの生活と遊び

・戦前は，芦屋神社まで出掛けたり，ヨットハーバーから海つたいに香櫨園まで行ったり，本山の保久良神社にも，年少の子も歩いて行きました。

・お弁当を持って園外保育に行きました。川の中や浜辺で貝拾いや砂で遊びました。水がきれいで，小さな魚，カニや海藻がありました。遠足は¥で阪神パークに出かけたこともありました。

・室内の遊びは，椅子に座って，折り紙をしたり，紙芝居を聞いたり，貼り紙をして遊んだりしていました。積み木，ままごと，砂遊びをしました。

・年間行事は，七夕まつり，運動会，クリスマス会，おひなまつり，お遊戯会，卒業式などがあっ

た。お遊戯会は，年 1 回の最大の行事で，扮装して大喜びしていたことを思い出す。お遊戯は，振り付けが決まっていました。

・戦争がはじまると，朝はよく黙祷があり，押し付け的な黙祷や式が行われていました。

・よく兵隊さんの慰問に行くようになりました。大阪の赤十字病院や遠くの姫路辺りまで，保護者の一緒に出掛け，歌を歌ったり，お遊戯をしたりして，大変喜ばれました。

（2） 戦争がはじまると （写真 13，14）

・子どもたちの夢は，兵隊さんになることが一番のあこがれになっていきました。

・軍歌を歌ったり，軍艦や飛行機を作ったりして遊ぶようになりました。

・戦中には，遊び道具がなかったので，指人形をよく作りました。

・蓄音機とオルガンはありました。

・保育用具とか材料はよく買っていただいていたので，終戦まで不自由はありませんでした。

（3） 幼稚園生活のいろいろ （写真 5，8，9）

・お弁当は，子どもに合わせて自由でしたので，11 時くらいになると新しいお魚の刺身や温かいご飯を届けに来るお母さんもいました。お弁当日は，月，水，金，週 3 日でした。

・服装は，私服で，カバンだけお揃いでした。名札はつけていました。お母様は着物がほとんどでしたので，教師たちも羽織，袴でした。

・健康面からみても，欠席は少なく，今の子どもより強かったと思う。

・身体検査や注射など保健行事は，小学校と一緒に校医さんに支持を受けていた。

（4） 家庭と幼稚園

・保育料は，市役所へ納入していただいていた。

・昔から名士の子どもが多かったので，保護者の方は非常に協力的でした。

・幼稚園に対する考え方も進んでおられ，後援会（PTA）をお作りになって活発でした。

・月 1 回の参観日も非常に熱心で，教師をとても大事にしてくださる風潮があった。

・子どもさんも非常に大切に考えておられた。

豊かな家庭の子どもが多く，協力的に幼稚園教育を支えていたことが，後援会の設立などからも分かる。しかし，子どもに知的教育をしてほしいという考え方はなく，かしこくえらくなるよう切なる願いをもっていて幼稚園教育に熱心だったと記されている。保育者はこの保護者の思いに支えられ，保育の向上を目指し，研究をしていくという素地が築かれていったと考えられる。写真 6，7 にその当時の様子が記されている。

写真 3　軍服姿で得意な子どもたち（昭和 12 年）

写真 4　陸軍病院への慰問

写真５　　桃太郎劇

写真６
精道村立精道幼稚園の当初の證書臺帳

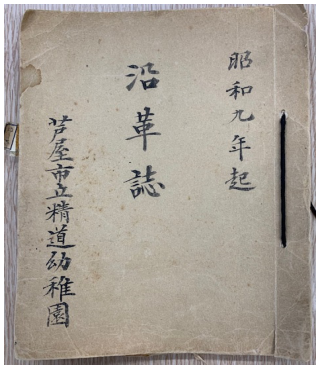

写真７　沿革誌

写真８　遠足　着物姿の母親の様子

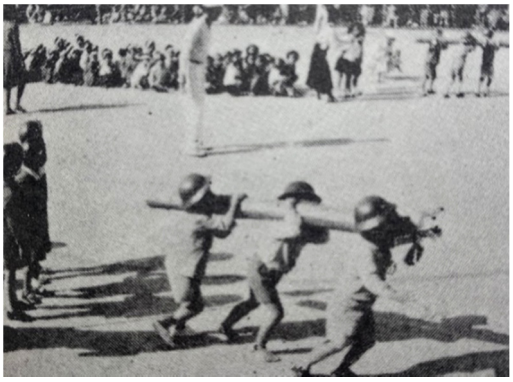

写真９　　運動会　　肉弾三勇士

表２　　当時の保育料

年次	西暦	保育料及び入園料
明治44年	1911	保…1円50銭
昭和 5	1930	保…3円
6	1931	保…3円50銭
20	1945	保…4円
24	1949	保…150円
25	1950	保…200円
27	1952	保…250円
28	1953	保…300円
30	1955	保…350円
31	1956	保…400円
33	1958	保…450円

表３　　貨幣価値比較表

種類	品物など	明治38年頃	平成12年頃	比　率
食べ物	たまご（１個）	2銭4厘	18円	750倍
	白米（１０Kg）	1円19銭	4,934円	4,100倍
	カレーライス	6銭	656円	11,000倍
	そば（もり、かけ）	2銭	443円	22,000倍
給料	高等国家公務員の初任給	50円	18万円	3,600倍
	大銀行の初任給（大卒）	35円	18万円	5,100倍
	小学校の先生の初任給	10~13円	20万円	15,000～20,000倍
	大工さんの手間賃（１日）	85銭	18,940円	22,000倍
サービス	国鉄初乗り料金	5銭	130円	2,600倍
	はがき	1銭5厘	50円	3,333倍
	映画館入場料	20銭	1,800円	9,000倍
	理髪代	15銭	3,612円	24,000倍
その他	自転車	200円	2万円	100倍
	目覚まし時計	1円38銭	5,000円	3,600倍
	新聞購読料（１月）	45銭	3,250円	7,200倍
	銀座の土地（１坪）	300円	9,000万円	300,000倍

表２の保育料を見てみると 1911（明治 44）年は，１円 50 銭である。当時の１円が現在の２万円とすると，保育料は３万円となる。小学校の教師の初任給が 10 円から 13 円だったということは，かなり裕福な家庭の子どもが幼稚園に通っていたということになる。また，沿革誌には，寄付なども多く，戦時中も保育用具等の材料はよく買っていただいていたと記されており，後援会の設立（PTA）など幼稚園教育を支えていた保護者の熱意の大きさを感じる。

４．戦後混乱時代

終戦後，1945（昭和 20）年８月６日園舎が焼失し休園以来，1946（昭和 21）年１月に 10 ヵ月ぶ

りに，教育委員会や教師たちの努力によって，幼稚園が再開された。

（1）如来寺時代

60 周年記念誌によると，如来寺をお借りして幼稚園が再開された。小さなベビーオルガン，小学校から借りてきた机代わりの裁縫台，境内にあった焼け残りのジャングルジム 1 つ，これらが，わずかな設備，備品であった。せめても子どもたちに夢をもたせてやりたいと，教師たちは，放課後は，紙芝居作りやぬいぐるみの指人形作りをしたり，糊を入れる容器がわりに浜辺の海を拾いに行ったり，折り紙を京都まで買いに出掛けたりした。「制作に使う糊ですよ」と 1 人ずつ配って歩き，今から使おうという時には，きれいに舐めてしまって無くなっていたという「舌切り雀」の話のような微笑ましいエピソードも記されている。当時の物資欠乏の一端がしのばれる。昭和 21 年 4 月，クラスは 3 クラスだったが，人数が少なくいつも本堂に集まって合同保育をしていた。歌を歌ったり，人形劇を見たり，お話を聞いたり，遊戯をしたり，絵を描いたり，折り紙を使っての手技をして遊んだ。寺境内は，よい遊び場になり，葉っぱを集めたり，ボール遊びをした。周辺の松林にも出かけ，鬼ごっこをしたりして遊んだりもした。また庭の一隅に机を出し，青空教室を開いた。当時の子どもの服装はもんぺ姿，お母さんお手製の足袋，下駄，わらじばきで丸刈頭がほとんどだった。教師たちは，毎朝，今日のびのびと生きる子どもたちであってほしいと願い向かい入れた。

表３　芦屋市立立精道幼稚園のあゆみ（昭和 21 年～36 年）

年　次	西暦	歴代園長	園児数	クラス数	あ　ゆ　み	園者の遷移	当　時　の　出　来　事
昭和21年	1946	井上　倍男	59	3	・園舎被災、焼失のため、如来寺を借りて再開する(1月15日)	如来寺	・日本国憲法公布 ・文部省「保育要領」刊行
22	1947		72	3			・「幼稚園令」公布
23	1948		79	3	・後援会を精道幼稚園PTAと改める		・教育委員会法公 ・「子どもの日」を制定
24	1949	竹村　越三	91	3	・如来寺より、小学校校舎にかえる(7月) ・小学校内鉄筋校舎南木造2階建て	小学校内	・湯川秀樹(ノーベル物理学賞を受賞)
25	1950		134	3			
26	1951	岡野　節郎	96	3			
27	1952		153	4			
28	1953		126	3	・市立川西幼稚園(川西町91番地)が創立され、園区変更して、阪神電車以南の幼児を入園させる		
29	1954	久野富美子	251	6	・精道小学童増加のため、教室不足となり、川西幼稚園車に移り合併し、臨時に芦屋市立精道・川西幼稚園と称する	独立川西町 市教委事務局建物	
30	1955		203	5	・市教委事務局建物内西側半分を使用する ・「私たちの指導計画1」を2年がかりで作成する(32年1月に完成)		・ソ連人工衛星生打ち上げ成功

31	1956		164	5	・山手幼稚園独立園舎新設に伴い、遠隔調整の結果、川西幼稚園は廃園となり、精道幼稚園は完全に独立する ・文部省より、施設補助対象幼稚園として選ばれる		
32	1957		153	4	・4歳児の入園を再開する ・新園舎の地鎮祭着工(7月27日)		
33	1958		203	5	・独立園舎竣工する ・落成式を行う(1月8日)精道町111番地	精道町１１１番地	
34	1959		194	5	・全国幼稚園施設協議会にて「表現活動と環境」久野園長(11月) ・全国図工教育大会にて「表現活動を推し進めるもの」関教諭(10月) ・全国幼稚園施設協議会にて「健康教育と施設」宮永教諭(11月) ・全国幼稚園施設協議会にて「健康教育と施設」宮永教諭(11月) ・「私たちの教育計画2」のテーマで研究発表をする。講師玖村敏郎氏(参加者約400名)		
35	1960		186	5	・園舎西には生道路拡張に伴い削られ、北に約60坪の園庭を設ける		・NHK他、8局カラーテレビ放映
36	1961		218	5	・創立50周年を迎える ・精道幼稚園歌が誕生する ・「子どもを育てる表現活動」のテーマで当園創立50周年を記念して第2回研究発表会をする　　(37.2) 講師　坂元彦太郎先生 参加者約300名		・モンテベロ市と姉妹提携

（２）　精道・川西幼稚園時代

精道幼稚園の歴史の一時期に川西幼稚園という分園の存在があった。直ぐに精道幼稚園と一本化されたが，それが独立園への入り口であったと記されている。園舎は，老朽化した２階建ての木造校舎，半分は市教委の事務局が使用していた。のびのび遊ばせたいということで，大きな土管２ケ，上に上がったり，飛び降りたり，暑い時には中にゴザを敷いて，ままごとをしたり，子どもたちはそれで存分に遊んだ。庭の隅に教師や保護者の方と池を掘ったり，教壇をステージにしたり，そこにかける緞帳をPTAの方が作ってくださったり，幼稚園は保護者の協力で支えられていた。

教師たちも自然な子どもの生活を見つめる中で新しい保育を探るということ，研究を進めていく必要性を記している。

・子どもをまずは先に立てなければ立てねばならない。

・自然な子どもの生活を見つめる中から，問題を拾うことだと気付いた。

・自由保育という言葉に目を止め，園児の名簿に一人一人の遊びを克明に記録していく。

・子どもたちの経験の偏りを避ける。

・グループごとの遊びを如何に他と関連し合わせることに苦労した。

・とにかく懸命に打ち込んで保育を探って，突破口を見つけたい。

「園の運営」「園の経営」を作成し，幼稚園の保育の目標を掲げ，個々を育てていく保育研究が始まった。写真10～13は子どもたちの遊びの記録写真である。

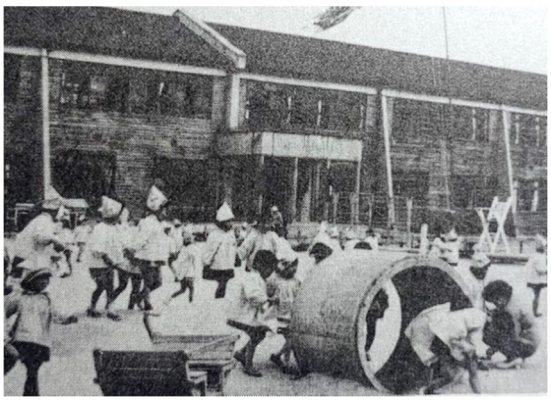

写真 10　園庭の土管で遊ぶ子どもたち

写真 11　　1.2.3！　元気に飛び込み

写真 12　友だちの作品を見入る子どもたち

写真 13　　コマで遊ぶ子どもたち

子どもたちが生き生きと遊ぶ姿を求めて，日々の保育の記録を丁寧に記し，省察しながら，保育の質の向上を目指した。

（3）子どものための新園舎建設への努力

研究の始まりと同時に子どものための楽園を求めて新園舎建設へ力を注いだ。理想の園舎を追求するの中で，子どもたちの遊びがダイナミックな遊びが広がるために，次のことを確かめ合った。

・保育室が一つ一つ庭に続いている。

・周りの保育室とは独立していて，お互いに邪魔し合わない。

・子どもたちが仲間と創意を出し合いながら誰にも遠慮なく思う存分自己を試すことができる。

子どもたちの遊びが深められる園舎とはどのようなものかを日々追求し，その取り組みが記録されている。新しく建った幼稚園は，文部省モデル幼稚園として高く評価され多くの参観者を迎えた。

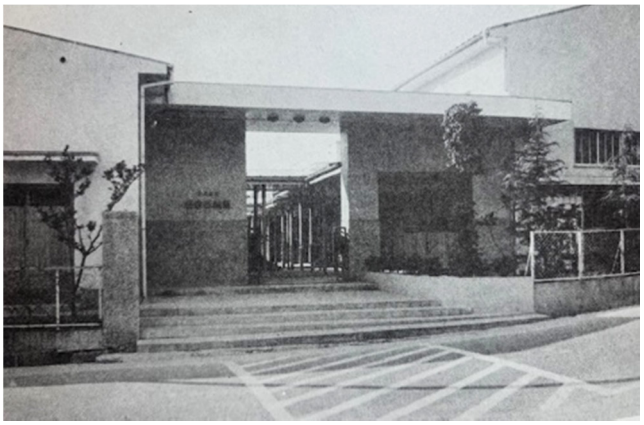

写真 14　　創設以来はじめての独立の新園舎

敷地面積	700坪
建築面積	266.75坪
園舎構造	木造平屋建　八棟連結
	保育室(6)、監察室(2)、遊戯室、保健室、職員室兼会議室、園長間応接室、用務員室、給食室、湯殿、倉庫(2)、玄関、テラス、プール、花壇、便所(2)、
運動場	
建築費	約14,000,000円　(市費と文科省補助金300,000円に依る)
建築経過	32.1.11　新園舎設計打ち合わせ始まる
参考資料	**文部省**指導課長補佐池田伝蔵氏の当園園舎設計図面
出席者	三枝教育長、木村建築課長、南沢係長、細見管理課長、山下指導課長、久野園長
	32.7.15　新園舎建設入札
	32.7.27　新園舎建設地　　精道町111番地
地鎮祭着工	33.1.8.　落成式及祝賀会

図３　　新園舎建築工事概要

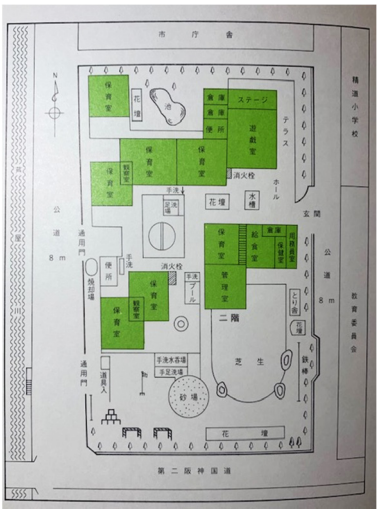

図２　　新園舎見取り図

新園舎の特徴について，以下のように記されている。

① 芦屋川の畔，北に六甲の山並み，一望に仰ぎ樹齢豊かな松の木を残す閑静なたたずまいの土地である。

② 園庭は，松の木をそのまま庭に残して樹陰をつくし，貴重な自然の趣の中で育くまれることを期待した。

③ 建物の配置は，よき緑の環境の松の木と，南に向かう斜面の土地を活かして保育棟，遊戯棟，管理棟の３ブロックをコの字型配置にし，機能的かつ管理が行き届くようにした。

④ 南側道路の将来における交通量を考慮して，管理棟を南にして，子どもたちの生活の場の騒音防止に役立てるようにした。

⑤ 保育室は床面積をなるべく広く使えるよう物品収納棚を壁面にし，南北テラスを十分にとり，雨の日も広やかに楽しめるようにした。

⑥ 渡廊下，遊戯室の屋上をあそび場にして，２回の子どものあそび場の拡大をはかった。

⑦ 遊戯室は集会の便を考慮して１階に，地形を利用して六角形とし，中央にトップライトを設け，一面を残して周囲をガラス張りにして，明るさと広さと出入りの便をはかった。

⑧ 保健，清浄，放送，更衣室は独立した室にせず，職員室に含めることによって能率的かつ管理が行き届くようにした。

子どもたちが存分に遊べるように，床の素材についても，子どもの遊びや生活を考えて検討を重ねたと第 12 代園長の久野富美子氏から聞いている。子どもが裸足で遊ぶ，跳ぶ，走る等の律動を楽しむ，転がる，這う等，子どもの様々の動きが存分にできるようにと考え，床を桜の木材にし，子どもたちが安全に遊びやすいように考慮した。

また，子どもの生活や遊びの動線を意識して，園内の全ての場所が子どもたちの環境として最善のものとなるよう検討，工夫して建てられた。

（４）精道幼稚園の園歌

子どもたちが幼稚園で，のびのび遊び，健やかな成長を育むためには，「自分たちの幼稚園」「幼稚園大好き」という気持ちが大事である。第 12 代園長の久野富美子氏は，子どもたちのために幼稚園の歌を作ろうと東京に出向いた。サトウハチロー氏に直接会い，園歌をつくってほしいとお願いした。作詞サトウハチロー氏，作曲松田トシ氏による素晴らしい園歌が誕生した。この園歌がこ

の後，子どもたち，保護者の方に愛され，歌い継がれていくのである。

精道幼稚園園歌

作詞　サトウハチロー
作曲　松田トシ

まどをあければ　いつでもいつも
まつのみどりが　こんにちは
かめのこ　ちびがに　でんでんむしも
ぴょんぴょこ　かえるも　まっている
ぼくの　わたしの　せいどうようちえん

かたをならべて　おててをたたく
うみのにおいが　こんにちは
はりえの　ぞうさん　ねんどのおうま
とんとこ　いっしょに　くびをふる
ぼくの　わたしの　せいどうようちえん

やまをながめて　みんなでうたう
かぜがやさしく　こんにちは
さんぱのすずめが　しばふのうえで
ちゅんちゅく　ピアノにあわせてる
ぼくの　わたしの　せいどうようちえん

５．保育内容充実へのあゆみ

1954（昭和 29）年独立してから，研究テーマを掲げ「保育研究のあゆみ」が本格化していった。

表４　保育内容の充実を目指した研究

年	研　究　テ　ー　マ	研　究　発　表
昭和29年	・幼児の表現活動をいかに育てるべきか。	
30	・幼稚園における正しいカリキュラムの在り方	
31	・同上	・「私たちの指導計画①」を2年がかりで作成した(32.1)
32	・「私たちの指導計画」の実践と反省	
33	・より確かな指導計画 施設を生かした保育 いい加減保育の正しい在り方	・全国幼稚園施設協議会(於大分市)にて「保育と環境」久野園長(33.11)
34	・子どもの成長段階を見つめた指導計画	・全国通行教育大会(於神戸市)にて「表現活動を押し進めるもの」関恵美子教諭(34.10) ・全国幼稚園施設協議会(於徳島市)「健康教育と施設」宮永通子教諭(34.11)
35	・子どもを最もよく生活させる素材とその深め方	・「私たちの教育計画②」のテーマで研究発表 講師　玖村敏雄先生　　参加者約400名(34.11)
36	・子どもを最もよく生活させる素材とその深め方 ・生活発表会は同あるべきか　　在り方 ・子どもを育てる表現活動	・「子どもを育てる表現活動」のテーマで当園創立50周年を記念して 第2回　研究発表会をする

写真 15「私たちの指導計画１」と「私たちの教育計画２」には，教師たちが幼稚園教育について考え，カリキュラムを立て，保育記録を取り，保育研究を進めていったことが記されている。自分たちのめざす保育はどんな保育なのか，どんな子どもに育てたいのかを常に話し合い，実践し，省察しながら，また話し合う。その繰り返しの中で，充実した保育を模索している。この研究の５～６年間に，随分と研究の取り組み方が変わっていった。幼児理解を深め，保育観を鍛え，保育の向上につながっていったのではないかと考える。

写真 15　　私たちの指導（教育）計画冊子①②

（1）「私たちの指導計画１」より

２年間の取り組みの中でまとめられた「私たちの指導計画１」は，

Ⅰ．幼児教育について考えること

Ⅱ．私たちはカリキュラムをこう考えること

Ⅲ．カリキュラム作成のためにこんな資料を用意した

Ⅳ．カリキュラムと遊びの綾

Ⅴ．評価と反省

Ⅵ．自由遊びに思うこと

Ⅶ．指導計画

という内容で構成されている。

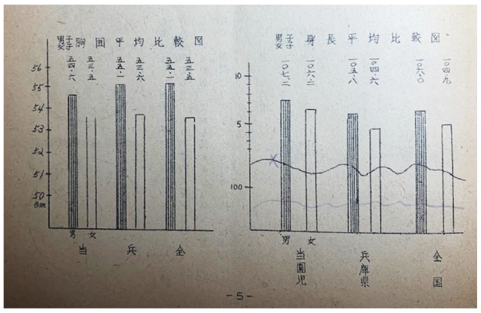

写真 16　　身体検査統計表

幼児教育について考えるという記載の中に「子どもたちの自然なくらしの中からたくさん芽生えて来たもろもろの芽をしっかり見分けて摘んだり育てたりするのが，我々幼稚園教諭の仕事である。と同時に良い芽が多く育つように土壌を掘り返して耕して行く仕事がより根本的で大切な仕事であるといっても，具体的にこの子をこういうふうに育て，これとこれはぜひ経験させねばならないと考える。その目的と方法を分析し道筋を立てたものがカリキュラムであると考えている。だから，学園，各クラス各幼児によってなされなければならないものであろう。(中略)　カリキュラムは，子どもを育てる目的の分析と発展を，教師自らのためにしなくてはならないものであると考える。だから年ごとにそれは改善され成長して行かねばならない。」とある。保育の質，保育力をつけていくことの必要性を述べている。より，具体的に保育を展開していくことが必要であるという気持ちが表れている。そのために，しっかりとした計画を立てること，見通しをもつこと，何よりも愛情をもって子への願いをもってかかわっていくことが，カリキュラム作成へとつながるととらえている。

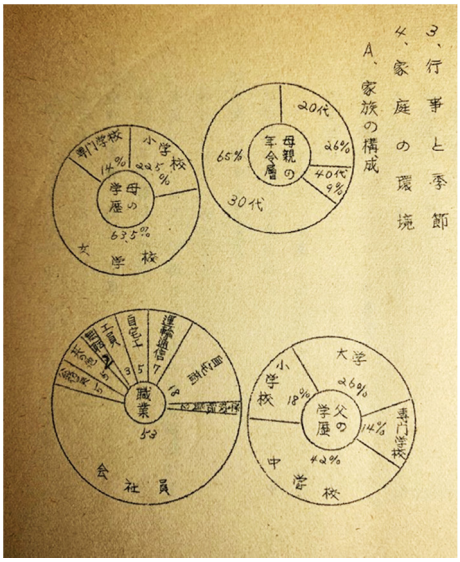

写真 17　家族構成

カリキュラム作成のために用意した資料には，以下のものがあった。

1.　教師の一般目標

・教育を教育基本法の示す幼稚園教育目標(学校教育法第 77 条，78 条)

・文部省教育要領

2.　幼児の実態(昭和 32 年度児による)

A.　生年月日表

B.　身体検査個人票と統計表（写真 16）

C.　長子，末子，一人っ子調査票

D.　素質調査

E.　行動と癖

F.　思考の傾向

G.　好む遊びと特徴

H.　玩具とその与えられ方
I.　おやつとその与えられ方
J.　遊び場所
K.　自分の要求に対しての父母の扱い方
L.　幼稚園に対しての好嫌
M.　お稽古事をしているか幼稚園の環境

3. 行事と季節
4. 家庭の環境　（写真 17）
A.　家族構成
B.　養育態度
C.　家庭の文化的環境
D.　幼稚園に対する考え方
5. 幼稚園の環境
A.　職員組織
B.　クラス編成
C.　園舎の構成
D.　幼稚園をめぐる観察場の地図
6. 保育の反省記録
A.　季節による遊びの特徴とリズム
B.　主題と小主題の取り方と子供の遊びの問題
C.　問題児の傾向と保育形態の問題
D.　遊びからうかがえる園児の特徴

５．小学校の学習形態と指導要領

保護者への細かくアンケート調査（写真 18）を行って，そのデータを分析している。

一人一人の家庭環境や育ち方に着目し，個人をより知っていくことを重視していることが分かる。家庭の文化的環境の中には，愛読する書籍，雑誌，新聞等も尋ねている。思考の傾向の質問項目についてデータを見ていくと，興味について，科学的なもの・情緒的なもの・スポーツの３択で尋ねている。質問傾向という項目では，科学的なもの・自然現象・情緒的・社会事象の４択になっている。興味深いのはアニミズムについて質問である。

生物，無生物を区別せず，事物や事象のすべてを生命あるものとしているというピアジェは考えアニミズムと称した。幼児にアニミズムがあるのかを保護者に質問するには，そのことを保護者も知っていなければならない。そういう理解については，保護者と幼稚園，教師方との関係性＝信頼関係が不可欠である。いかに，幼稚園教育を理解し，協力的であったかが伝わってくる。また，現在であれば，個人情報といえる項目も多い。問題のある子どもという表記

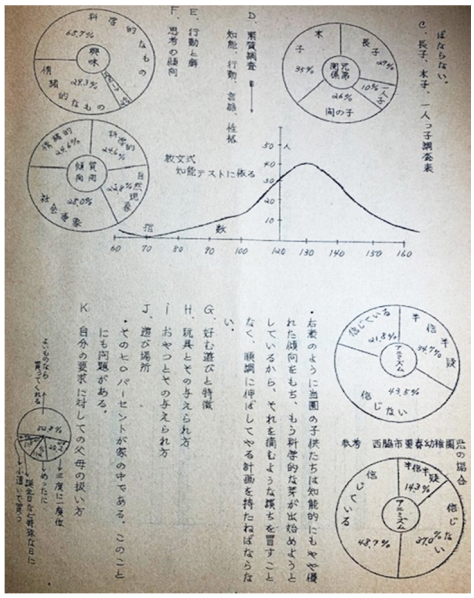

写真 18　アンケート集計

についても現在は支援の必要な幼児ということになるのだが，時代背景がうかがえる。教育熱心な保護者の協力が強かったということが分かる。保育に対する熱意が伝わり，子どもたちの育ちをどうとらえ，伸ばしていくのかを模索しながら，研究を進めている。

また，「カリキュラムと遊びの綾」という項目では，教育目標が以下のように記されている。

1. 健康でたくましい子
2. 自主的に生活を営む子
3. 愛情豊かに暮らせる子

この目標に向かい，一人一人の持ち味を受け止め，保護者の願い，教師の願いを込めてカリキュラムが構成されていったのであろう。

（2）「私たちの教育計画２」より

2 回目の研究冊子である「私たちの教育計画２」は，手書きではなく，印刷になっていて，写真が使われている。「私たちの指導計画１」では，写真は 1 枚もなかった。技術の進歩も感じるが，保育を語る時に，子どもの様子が見て取れる写真が有効的であるという教師の思いが伝わってくる。

1 回目の「「私たちの指導計画１」から実践を積み重ね，反省し，追究し，その記録をまとめて作成されている。

実践の反省と改定の理由「動かない焦点」を

・子どもの生活が先ずあるということ
・一人一人の成長を助ける教師でありたい
・一人をも落とさない

とし，「教育は一人の子を育てるものである。どんなに立派な子がここから育ち出ても，一人が取り残されていたら申し訳ないことである。一人一人を大切に，その子の精いっぱいの成長を誠実に助けてやりたいと願うのである」と冒頭に記されている。

「私たちの指導計画１」から「私たちの教育計画２」へ，実践の積み上げの中から一人一人を育てる保育研究へとつながっていったのである。指導から教育という表記に変わったのは，個（一人）を育てるということへの意識の表れではないかと考える。

６．今後に向けて

芦屋市の幼児教育の変遷を辿った結果，保育の素晴らしさを感じるとともに，その時代に精一杯子どもと向き合うとした先人の思いに触れることができた。そして，教師たちは一貫して子ども中心の，一人一人を育てる保育を構想し，質の高い保育を目指して自己研鑽していたことが明らかになった。そのため，一人一人を大切する保育，一人一人を生かす保育は，社会や時代が変わってもその視点，その姿勢は継承していかなければならないと強く感じる。今後の課題は貴重な実践記録をもとに幼児教育の重要性を深めるとともに，本稿で紹介した「私たちの指導計画 1」および「私たちの教育計画 2」に携わった当時の教師へのインタビューとして研究を進めていきたい。

参考文献

(1) 横須賀薫・千葉透・油谷満夫『教育の歴史』河出書房新社, 2008.
(2) 精道村立指導幼稚園『沿革誌』昭和９年起
(3) 芦屋市立精道幼稚園『創立 60 周年を迎えて』1971.
(4) 芦屋市立精道幼稚園『創立 70 周年を迎えて』1981.
(5) 芦屋市立精道幼稚園『私たちの指導計画１』1957.
(6) 芦屋市立精道幼稚園『私たちの教育計画２』1959.